

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアにおける上座仏教と上座仏教徒

黄蘊（京都大学・研究員）

東南アジアでは、上座仏教の国といえば、真っ先に浮かび上がってくるのはタイとミャンマーあたりとなる。実は東南アジアの大陸部と島嶼部を結ぶ通路でもあるマレー半島にも、上座仏教の種が早い時期からまかれていた。今日その種が花開いているのみならず、独自の展開の局面を迎えているのである。

もっともマレーシアでは大乘仏教が仏教の主流で、19 世紀以来華人移民の大量到来につれ、大乘仏教がマレーシアで徐々に定着し、開花するようになった。今日に至り、信者数、影響力といった意味において、大乘仏教はマレーシア仏教界の主流であり続けている。一方、上座仏教は、中継地点というマレー半島の位置的特徴を反映しているかのように、19 世紀以来ここを通過する上座仏教国の僧侶たち、彼の国々の移民によって持ち込まれてきた。同時に、マレー半島北部のクランタン州、クダ州などタイに近い地域では、もっと早い時期からシャム人による上座仏教信仰も存在していた。それがいわば外来系ではなく国民国家マレーシア「土着」のものと捉えられる。

このように、マレーシアの上座仏教に関してはいくつかの伝来ルートがあり、上座仏教寺院としては、タイ系、ミャンマー系、スリランカ系の三種類がある。これらの上座仏教寺院は、当初、タイ、ミャンマー、スリランカ系移民の宗教的ニーズを満たすための施設という位置づけを有していた。しかし、それは他のエスニック集団の住民の参入を阻むものではなかった。1920 年代前後より上座仏教寺院への華人信者の参入が増加し、今日では英語教育、英語話者中心の華人信者はすでに信者のマジョリティとなっている。寺院の運営と儀礼の執行はミャンマー、タイ、スリランカ系僧侶によって執り行われるが、華人信者の各種活動への参画、そのサポートも不可欠な要素で、両者の緊密な協力関係が諸上座仏教寺院を支える決め手となっている。

1980 年代以降、マレーシアの上座仏教界に新たな変化が起こりつつあった。その顕著な表れとなるのは新しいタイプの上座仏教センターの出現と台頭である。タイ(シャム人)、ミャンマー、スリランカ系の伝統型上座仏教寺院は儀礼中心であるのに対して、地元の華人僧侶、信者の手によって作られた上座仏教センター、協会は知識型、実践型という特徴をもつ。後者は現在、

すでにマレーシアにおける上座仏教の重要な局面となっている。



華人信者が食事の寄進を行っている様子（筆者撮影）

その背景として、現地の上座仏教系マレーシア人僧侶（基本的に華人である）または、信者層の成熟化があげられる。現地人華人僧侶の数はここ 20 年来、増加をみせ続けている。近年、現地人僧侶、信者の中には「真正な」仏教実践を求め、瞑想や仏教知識の研鑽に目を向ける者も多く現れている。彼らの仏教実践、「修行」に対するニーズ、要望に動かされ、瞑想中心の新規上座仏教センターが作られるようになった。

多様な宗教知識源、実践形態、または上座仏教徒の多様なエスニック構成はマレーシアの多元的「上座仏教世界」を特徴付けるものである。そのうち、現地生まれの「修行中心型」の上座仏教センターの台頭は、マレーシアにおける上座仏教のローカル化、「マレーシア化」を表すもので、独自のストーリーを展開するものなのである。

< 筆者紹介 >

1974 年、中国陝西省生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士（人間科学）。専門は文化人類学。マレーシアとシンガポールの多元社会の問題、中国系の民間宗教、また上座仏教について研究を続けている。マレーシアの上座仏教徒の活動範囲の拡大とともに、インドとスリランカでも調査を行っている。著書に、『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰徳教の展開とネットワーク化』（2011 年、風響社）など。